



俱お待んぞ。只管お路をたぐり辛くして其曠氏果辛崎の関不到り。那木牌をり。障り多く過るをゆれども又阪本へ赴く程に既して日の暮るに夜の出入を許され。門戸を固く鎖し。関と関と交れて宿る。宛家もあなほ口得阪本を。関門の道邊に露宿あり。天の明るを待し。詰朝振の時候までもいまだ関門を開ね。心情地を訝りて。宛も果さぬ人と俱お敢て喚門を。左やん右や。とたり。ち聚ひ額を合して商量を。存りける。己牌近く。時候猛可。関門の内開き。疾辛崎の関へ加勢きて。大江と。公艦必見を搦捕る。柄合せ。宛も人々後あると罵ら。相促して。ちも出た勢ひの。ちも合もどく。ちも親兵衛が伴當の。愈訝り且驚き。原来主六虎と。獵得く。辛崎も。来る。ひける。那那の関今。疑ひ。過る。と。饒さ。主の。怒り。不堪。して。闘争。及び。を。這里。も。早く。聞知り。加勢。は。勢。を。あ。む。む。世の。常。言。い。へ。と。あり。大。厦。の。傾。え。と。ま。る。時。一。木。の。柱。は。あ。を。我。們。も。亦。余。之。醋。も。盛。り。も。僅。七。七。名。那。里。も。た。

ても大敵を殺頼ま力足とも。這里に在ても加勢の士卒を林にた擬勢あり。も。何。麼。せ。ま。う。と。相。譚。ふ。る。も。中。潛。地。喜。勤。大。と。喚。做。る。伴。若。黨。あり。毎。日。詞。寡。く。身。の。看。作。る。も。う。り。あ。の。時。一。霎。時。沈。吟。して。衆。人。の。悄。語。を。今。這。火。急。の。境。に。在。て。長。詮。議。を。交。わ。る。も。兵。ち。拙。策。を。賣。べ。久。う。も。巧。る。を。好。む。も。と。る。も。を。我。急。案。の。算。計。あり。固。様。も。ふ。り。ん。這。関。の。士。卒。も。一旦。加。勢。も。必。慌。引。返。え。足。り。外。の。術。あり。と。と。と。大。家。も。ち。や。開。有。理。奇。妙。る。哉。の。加。勢。の。疾。歩。と。潜。り。板。屏。の。木。節。の。孔。も。團。も。あり。其。餘。の。各。息。を。籠。り。て。る。も。樹。陰。に。站。在。り。有。信。一。程。本。関。の。頭。人。根。古。下。厚。四。郎。鶴。宗。の。辛。崎。の。関。に。加。勢。も。那。艦。必。見。大。江。親。兵。衛。を。我。疾。搦。捕。ん。と。騎。馬。奇。め。一。百。有。餘。の。隊。兵。を。前。後。不。從。へ。関。門。颯。と。推。開。せ。り。馬。を。甚。奮。直。奔。出。し。鞭。を。鳴。り。て。走。る。も。士。卒。も。俱。お。足。信。と。皆。後。れ。を。續。け。折。り。関。の。這。方。史。の。客。及。地。方。の。莊。客。の。今。朝。早。夫。より。あ。柳。め。ら。れ。て。関。門。の。開。く。

多者幾十人より今関の啓くを見て吐と嘔る。三七二十一。相入る。守屋の関  
 卒の名告を多。懐多。実を合。関せま。関卒們推禁めて。大家名。端り  
 る。知。辛崎の関。魁。見。目今加勢。事。の。鎮。當所。の  
 出入を。疾。退。聲。叫。酒。制。人。後。入  
 来る。衆。推。程。親。七。の。伴。當。事。の。紛。逸。早。守。屋。の。裏  
 潜。入。准。備。の。火。索。を。投。擲。那。這。火。を。放。り。其。火。忽。地。煽。々。自。枝。の。山。風。吹  
 散。猛。火。の。勢。勢。輒。遇。突。智。の。暴。虐。似。火。害。誰。敢。驚。謀。當。関。の。士。卒  
 們。の。壯。者。皆。頭。人。鶴。宗。從。辛。崎。の。緝。捕。の。加。勢。出。る。後。れ。這。里。殘  
 在。在。兵。の。頭。走。卒。も。老。鈍。の。十。數。名。今。這。異。変。心。慌。火。を。打。滅  
 欲。者。驚。退。衆。人。と。俱。慌。忙。逃。関。外。親。兵。衛。存。當。是。お  
 い。く。便。宜。煙。裏。衆。聲。高。関。を。作。り。礮。を。飛。越。逃。と。趕。と。急。り。け。れ。関。の

士卒思ひ。敵。火。攻。せ。れ。胆。怯。心。惑。敵。の。多。官。省。背。り。來。り。行。客  
 皆。敵。と。思。ひ。返。合。者。多。又。客。莊。客。們。の。側。杖。打。れ。と。走。程。趕  
 辛。崎。の。関。を。あ。け。然。阪。本。の。頭。人。根。下。鶴。宗。の。老。松。惟。一。と。相。資。け。大  
 江。親。兵。衛。と。相。挑。む。関。戰。の。央。那。阪。本。の。火。の。起。る。及。び。辛。崎。も。阪。本。其。路。几  
 頭。上。の。遠。望。む。見。れ。鶴。宗。惟。一。兩。隊。の。士。卒。那。火。の。自。家。の。裏。伐。せ。敵。を。破。入  
 関。を。燒。せ。て。逆。寄。者。多。今。這。大。江。一。騎。ま。り。勝。を。取。る。と。か。那。大。敵。攻  
 伐。れ。孰。免。者。あ。ら。ん。と。思。料。多。感。恐。駭。怕。れ。立。足。も。大。津。の。り。逃。走。り。大  
 大。津。も。加。勢。の。來。り。大。杖。入。道。一。隊。の。夥。兵。も。是。が。為。找。ぬ。刺。自。方。推。戻。され。大  
 津。の。関。破。れ。け。王。客。の。勢。地。を。勿。ろ。智。愚。と。勇。怯。の。差。別。あ。る。看。官。越。思。へ  
 抑。大。江。親。兵。衛。の。益。世。の。勇。士。と。も。那。身。只。一。騎。ま。り。三。関。の。士。卒。三。四。百。名。と。敵。の。挑。戰  
 時。立。地。不。敵。走。り。且。勞。せ。て。三。関。を。破。り。擇。り。理。の。あ。る。め。り。と。初。

思ひ者も有命を重てあふ詳なき文も必先後あり言一朝あふらける本末を照し見よ  
 同話休題却説大江親兵衛の三箇の國の緝捕の士卒の二箇不倣りて敗れ走るを趕々  
 其投を路をぬ天津の國に來れば本國に在る士卒の數馬に慌走り出で來ぬ身方を  
 引入れて門戸を閉んと欲する人言けれ相逼りて左右より門扇の合を疾入るると喚  
 程親兵衛の趕續る馬を関門に馳入れたる敵を又入りて打拂ひ敵退けて那方門  
 もも衝とせ九三津の方を赴くと大杖入道見るは堪はず怒り聲を震立く噫を斬る  
 る兵無哉三隊の士卒を束ねて一個の敵を林にぬれ去孰り後難と免人志ある者  
 我續けと鎗拵り馬を拍れ追蒐れ惟一鶴宗の六隊の親兵衛今這一句の  
 氣をゆる競ふ百十數名噓て近づく人馬の足响既し程好作りし時親兵衛を馬の  
 鑢面を兼振りしち向ひて若們白人先度不微りぞや恥と思ひ皆蒐りぬるをも敢ま  
 意鬼の檢物鶴宗惟一相並り鎗を拵り親兵衛を刺んと俱に競ふ折る後方不馳

ある馬蹄の音ありやれ兵毎疎忽るせと大江生も姑且止れ相公みづら來りしりよ  
 在戦ふへくと喚り林に近習の聲の檢物惟一鶴宗を從ふ三隊の親兵衛も吐  
 嗟とたりの驚馬に齊一急不見かれば果して是別人をぞ京都の管領左京大夫  
 源政元へ政元の目打扮の頭小窠子鳥帽子を戴れて純緑の蛇龍の赤伏錦  
 綉の狩衣を精好の奴袴を張る綾衣を上服と膝膊の白小袖を下襲ふし身甲  
 肱衣蹠織を探領ひ黄金製の大刀小臯皮の尻鞆單を腰に佩り圈子青の太  
 逞馬小韓鞍措して優ならち跨り此糸の漆鞆を左の小操る馭法正しく馬の足  
 程を早め來ぬ前後左右不從ふ伴當十餘名俱に皆是山鶴衣裳あり各弓  
 矢前を推し他の士卒幾十名後れらけ相續るを只姚雪代四郎直塚紀三六  
 火家の親兵五名と阪本より來ぬ潛地喜勘太門大江の伴當七名と政元不從る  
 齊一越不聚合ける今這事の光景は二箇の頭人親兵衛共驚馬に怕る者る左

中を早く辟き果て稔物惟一ねんぶち。鳩宗ハ馬より控と蜚下り。地上ちのち不跪坐つゝわ。相迎あひむか。親兵衛あへんべも馬を駐て阿容あひら色いろを扣ひえり。當下あつた政元馬を駐まり。信しん之の頭人あたまふらち向むかて。若わ們らもど理不盡りふじん。大江親兵衛おほえを搦捕なわとら人ひととて反かへて之の関せきを破やぶられ。最鳥もとい崎さきと叱な懲ちやうせ。老松らうそう惟一いちかそく。頭あたまを拾ひろひて稟まをす。相公あまのこう上のうへ御坐ごます。小可せうか毎ごと事こと好このむ。追捕おひとら及およびひら親兵衛あへんべが射やて殺ころす。云い虎とらの虎こ実まことを見人ひと與よ人ひとを談講だんかう谷や遣つかせ。其證迹そのあき多おほ故ゆゑ不遂つひ抑留おさへりの及および。親兵衛あへんべ敢あはて兼あ伏ふせ。反かへて狼藉らうせきを做なす。至いたて己おのれとて野の兵へいをり。搦捕なわとらす。若わ折せ阪はん本ほん大津おほつの兩頭人りうあたま鳩宗とらねん稔物ねんぶち加勢かぜとて。隊兵たいへいを領りやうて來き身み程ほど阪本はんほんの関せき在ある。士卒しゆそ裏うら表あはの者ものや。火ひを放はなち敵たけを引ひ入れ。刺さ襲おそひ。あふけれ。之の隊たいの士卒しゆそ驚おど慌わう。摠さう敗た走はり。喞う言ごかき。陳ちん表あは大杖おほえ。稔物ねんぶち根ね古こ下げ鳩宗とらねんのや。春はる蠶さ出いて。目め今いま湖うみ大夫おほおとが稟まを上のうへ。御ご向むか其その告つげ。加勢かぜ仕つかひ。那な火ひの故ゆゑ合あ期きせ。不ふ覺かく御ご外あ日ひ業わざり。罪つみを免まる。不ふ路ろる。

始はじめより親兵衛あへんべを射やて落おし。斬きり殺ころす。かきもわらへ。生拘なまる。故ゆゑ不覺ふかく。後のち悔くわいの良よれ入いり。い。の。敢あはて政元せいげんの堪た。聲こゑを奇あ立たす。這こ相あ似に。白しろ徒と。其その非ひ飾かざ。愈い鳥とり崎さきの曉あけ方かた。大江親兵衛おほえが射やて斃ある。那な虎とらの我われも山路さんじゆの便べん宜ぎ。今いま朝あ目め擊うち。一ひと惟ただ。遣つかせ。云い実まこと檢けんの士卒しゆそ。何なにを見みる。や。升のぼる。不ふ有あり。之の同おな。曾ま親兵衛あへんべを搦捕なわとらす。欲ほす。是こゝ沙汰さたの涯は。又また鳩宗とらねん稔物ねんぶち陳ちん。亦また謂いふ。那な阪本はんほんの守屋まもりやの火災ひさいの野の心こゝろの者ものの自みづか焼やり。失ある。失ある。其その折せ那な里りの抑留おさへり。地方ちゆうほうの莊客しやうかく行客ぎやうかく們らが。烟け火ひ趕おれ。逃に迷まひ。幸あ崎さきを投な。近ちかく。若わ們ら疑あや心こゝろ暗鬼あんきを生なす。襲おそひ。敵たけと思おもひ。夜よ是こゝ亦また沙汰さたの涯は。之の親兵衛あへんべが伴た當たう七しち名な。昨日けふ歌宿かじゆくと直ただ去さり。阪本はんほんの関せきの這こ方かた在ある。主しゆの尼に。難がた。知しる。先ま途みち不遇ふぐ。走はり。方かた僅わずか。我われ。告つげ。又また那な莊客しやうかく。客かくの訴う。具ぐ不ふ知しる。有あ。是こゝ若わ們ら其その罪つみ既すで不ふ分ぶん明めい。又また異い日ひの御ご沙汰さた。

在仁能立ねと叱られて、惟一と、鶴宗の唯々とするの士心を多う、各親兵を従て塩尻近山塩の塩の辛崎阪本の関路を投て退る由、大杖入道檢物へ生勇を角折れて、撞木を似するに、足敵の虫の名を負ふ露の身小奉加の帳の如き祈り佛を憑り果敢る心鬼の我と蓋て丹塗のつらかりし世を不娘し、不喜ゆむ、そは依此下退るく親兵共侶主の後方いまぎ聚合の伴の士卒の不足を權且補ひけ、登時政元、又聊馬を找め、馳て閃り下兵親兵衛も亦持る又々を後方へ托地と投棄て、下馬して找近は程小大杖檢物を見、是を見て親兵を守屋へ走らせ、則て登見と草相を、王客の與儲るを政元と急推禁め、今日の送りの私事へ、豈貴賤を分て、俱小登見を用ふへ、を親兵衛敢其連の固辭を找き、政元強て饒ひ、親兵衛只得發を乞得く才小尻瓶掛けり、徳て主客傾蓋の野席を定り、と親者情地小相稱く、とは死栄を有徳一程の政元、從ひ来て、り、桃雪代四郎直塚紀二六並五個の親兵と那七個の

當漕地喜勘大僧、皆遠く身を起して走り、親兵衛の後方小造りて、或馬の鑣を合ひ、或鎗も建甲曹樞の杖を解かて、齊整とて跪坐り、徳而政元の竟女小親兵衛より向ひ、類稀多安房の召臣約束違は、那虎を對治の事、形迹を我既小目撃も、あはれ、の快び、いんそ追々、あはれ、介、小之関の頭人等、勸小瓶疑て、櫛捕多欲、其罪孰も輕く、其日謙断せん、の我面を顧、權且用捨甘か、これ、親兵衛登見を放て、謹と兼て答る、分小過る御懇命、面目小慮優とる、既不知、せ、あ、上、稟解、及び、小人談講、合の頭を、那虎を射て、擊、折、尋、來、小伴當紀二六を那里に留め守り、且小人を今朝早天小身單辛崎の関を造る、那関符を、東路過ら、欲、小豫證、据、の與、小虎、の隻耳を、研、合、る、懷中、に、み、小送る、ら、あ、さ、つ、れ、小實、檢、使、を、請、て、遣、せ、其、人、も、見、が、り、一、快、反、之、我、言、を、伴、と、く、再問れ、猛可、阪本、大津、を、兩、關、合、不、謀、合、多、櫛、捕、多、せ、れ、已、上、を、湯、を、敷、

散して逃るを迂々本津の園を過りてあまきまぬれども一個の敵も敢害せざる是實也  
 と矢腹も送る一條の箭を抜きて其本末を示してさう小入逆用意あり穽前より  
 才二條の其他の都てかゝの如く皆其鏃を抜棄て代るふ木丸をせりて緝捕の  
 士卒を射れども懲るるも死に至る又那又及を奪合さく逆言も射をせし捕り  
 かつ又只那身を馳傷らむ備へ中傷兒あり同士撃もあつた今も己が刃也傷ら  
 るるは使我知る所ゆひ首正もせり。自他の好む其用心の同くぬをいふ害害者  
 多かりと言委まら鮮諦と政元すら感嘆して今初ぬ和郎の仁心帝其武勇の  
 千萬夫は授けるるをも智計も亦百陳平の勝まうとらひ死事の便宜もさう  
 和郎の伴當蛸雪們忠信徳義も亦ゆり。言長とも听ねが。昨宵も福事  
 多かり。往日より暴虎の防御とく。河原小勤役を課せら。種子嶋中太紀内鬼  
 平五鞍馬海徳を敵齋経緯の澄月香車小師弟の怨ふもて鬼平五経緯の

矢場小敷も果され中海傳師弟と香車小師弟の勤役の野兵們が逆心の鏢  
 砲小敷も殺されて甦生自他の弟子二名も過ぎ野兵們が奸虐も亦立地露露覺れ  
 るが威口捕せし牢獄に在り事の異変の搗も加え。昨宵九鼓の時候より我  
 女兒雪吹姫の臥房に在るごと云許あり。其臥房の形迹を檢せし枕添ふ  
 しては兩個の女房に絞られ。次の間小死しあり且の比より暴虎調伏の藥後堂の  
 法壇に在りて堅削の疾病あり。昨日宿所小辭し去りて徳用那里に在り  
 る。とすえり疑ひ他者も在り遠くあり追鬼よも猛士卒と部て四境中  
 遣まのうら我心るや安らむ雪吹の我養音の女兒也。実の今出川殿  
 崩るる階落の兇僧徳用等が邪淫の辱小遇し必我上るべと思へり。落着  
 くと。あやうのゆかりんより我みづら立出て求捕るふ不如と尋思をあら。又遅擬せ近  
 臣波々伯部十郎等皆是夜勤の士卒との甲乙と相従へ。曉りてそれをも投て去





八十八卷之九

大津の驛  
稍盡處  
親兵衛  
政不辭別



八十八卷之九

大津堂藏

て向を定め、漫の三條大橋の邊まで來りける時、和郎の伴當、姥雪代四郎與保が、  
 雪吹姫の死を救ふべく、載て邸へ送り來ぬ。逢ひけり。あま至り、徳用堅削が、虎狼  
 野心の事の顛末、且他者の姫を竊ちて白川山なる敗堂に、穂ひ折那虎小撞見と  
 徳用の隻腕、堅削の隻脚を、喫れ、付きて在り。雪吹姫も氣絶して、又活るもあ  
 かり、和郎の伴當の内中、小重なる、姥雪直塚、門六七名、和郎の先途、お遇んと  
 昨日、歇宿を立去り、白川山は夜を深し、尋も逢む憶き、那敗堂の頭、お來り、裏  
 代四郎が、和郎を受とり、云、神某、その姫の死を起し、又直塚、紀二六、その某、その西  
 個の悪僧、そのおを、謀りて、他者、その日、屬の詭詐、毒悪の趣を、ぞ知  
 ことを、云、後の這一椿事、敗堂、お留置れ、兩個の伴當、信々と、告る、おより、我  
 も亦、知らず、おと、徳用、堅削、和郎、お、舊怨、ある、その、屢、詭言、お、我  
 一切、信、容れ、お、然、お、其、言、の、皆、伴、當、お、お、思、ひ、つ、和、郎、を、疑、ひ、お、裏、結

城遣、その那、兩、三個、の間、謀、見、昨日、曛、氏、お、か、る、來、り、報、一、那、地、の、実、説、を、思、ふ  
 徳用、お、言、巧、密、訴、の、都、く、誠、女、お、開、を、和、郎、お、解、さ、る、と、お、合、せ、る、と、然  
 る、我、淺、慮、る、徳用、お、俗、縁、深、に、始、母、子、を、れ、萬、支、お、就、く、い、と、憑、く、思、ひ、お、感、ひ  
 醒、く、憎、も、百、倍、明、日、の、那、奴、お、罪、を、糾、て、仇、と、懲、え、お、思、ひ、の、お、お、お、及、ぶ、ら  
 け、其、夜、の、中、お、又、幾、層、の、悪、事、を、做、る、真、罰、觀、面、同、惡、の、徒、弟、堅、削、と、俱、半、體  
 不、具、お、る、と、尚、死、お、ら、い、の、儆、戒、を、世、お、無、の、神、慮、佛、意、の、奇、事、お、お、お、お、お、ん  
 此、お、是、我、徳、を、和、郎、お、勸、解、る、怠、状、の、要、畧、お、且、か、の、如、し、却、昨、宵、我、の、中、途、お、く  
 姥、雪、代、四、郎、お、逢、ひ、時、隨、即、伴、の、老、黨、お、雪、吹、姫、を、受、合、お、各、を、士、卒、お、分、ら  
 冊、け、く、邸、へ、お、遣、り、猶、お、思、ふ、お、れ、路、疾、走、る、伴、の、近、習、お、分、付、く、裏、お、虎、の  
 脱、去、お、那、菊、軸、を、お、相、と、共、お、疾、り、て、來、よ、と、い、お、け、り、又、西、陣、お、走、り、せ、け、り、徳、而、我、身、の  
 自、餘、の、伴、當、を、從、へ、く、代、四、郎、お、を、御、導、お、お、那、白、川、山、お、敗、堂、お、來、て、見、る、お、果

徳用堅削の隻も隻脚を傷り喪れて結紐られ樹下の居り并をもち守る代  
 四郎名の火家の伴當二名在り。這餘の伴當直塚紀二六が箇様々々の算計を  
 りく。件の両悪僧の奸虐を編造の顛末を招了致させると云且紀二六を和郎の  
 粘り事趣を告ぎ多く欲しと。索て山路をたどり入り其崖略を告ぐ我則伴の  
 士卒七八名若們的這徳用堅削を西陣へ吊りおめて有司を告ぐ牢獄に繋ぎ  
 せと分付れ其者則其頭を藤蔓を杖合らるる早く編り壞籠を造り馳  
 兩個の悪僧を載り四個の奴隷を昇せり。西陣へ領りおたけり有徳一程我西陣  
 邸より王僕の盒子偏提の酒前茶を餽す士卒五六名索りてお來りし我  
 件の敗堂を偏提を啓り夜寒と凌ぬ且姥雪代四郎们都と和郎の伴當の當  
 晩功あると譽て酒を合せるとも我伴當の口々盒子を受合て是を喫代  
 四郎と其火家の立個の準備の盒子あれがと。并を合せてり夜食と食時我又

思ふ中御徳用謀一合され仁を相敷きまきとせえ。正景景紀真賢經  
 緯の直道同士敷せられて及く其隊の夥兵の為小切まり。親兵衛が上取りて  
 どのもの後易けれも我偶あまを来る。親兵衛が虎を對治あるや否を見も  
 せもせでかへ去る。遺憾非如天の明るも山又山小り入らばいふと逢ふ死を思  
 ふあると代四郎們も我伴當も宣示り遂に敗堂を立出馬を山中越のうも找  
 る程小川村中へ天の明け。浩処小前而より來ぬ里人路備し跪き我伴當告  
 ゆる。恐るる。相公の西陣る。管領様あんと見せらるる。稟上り一椿事侍  
 下。方僅談講公の邊境中。大江殿の伴當直塚紀二六と喚做き若當黒不馬  
 ひは其所以の箇様々々。恁々おひと。暁天の親兵衛が那景茶虎を那里あり射  
 斃死と云事の光景をうつ。隨小告訴り又宣示を。那直塚のいれ。早く西陣の  
 御館へおの毛を告され大江主の咱們を留め。虎の骸を守らるる。主と既小歸東城

急に敢て天の明るを待ぎ平崎のうへに赴はぬ。其の送る時上よりいれり。
 然る感と走りてあまを來ぬ程折も又と相公様の出まける逢逢あり。幸の上
 幸の上とてそのうち代四郎門が飲ひ涯りる。我も亦怡悦不堪。疾談講谷
 赴はぬ。散れり虎を見まき思ひ先伴の青侍二名を召と。若們的舊路を走りか。昨
 宵我中途より伴の近習を呼返して那菊軸をのこ末と分付る。其其甲の末ぬ
 る逢に俱して談講谷へ参る。とある。又伴侍る近習の二膳波
 波伯部十郎真忠を召と。爾の這白川村の莊客と召と召聚令。談講谷へ領て
 参れ我其夫役の虎の骸を昇りと京師と願して兩御所。室の憲覽の歎な。且
 洛内洛外を貴賤に見せ。後まの話柄は做す欲は疾速せ。と分付て殘し留
 め我亦連り馬を早む。代四郎自他の伴當も心勇まを。後る者い。
 我伴當の寡は半介と雪吹姫を隷遣。其後亦路次中。所要を課。

既にして我亦件の里人を御導す。朝日山峽より昇り。時候談講谷へ來り。
 姥雪代四郎先走り。則紀二六より出る。雪吹姫の歸館の。我早く來て虎を
 檢去。事の便宜とて。紀二六を開を。相迎へ。馳て我馬前を見
 参。登時我馬より下て紀二六を訴を。和郎の射法の今古類稀。其智
 慧も亦當意即妙。虎の兩眼を射れ。故に矢場不斃れ。と云我其言を。果て。隨即
 件の虎を檢ま。其小大犢等。一升が左右の眼を。管深く射れ。鏃騰りて赤松の
 幹に緘れ。仰反在り。且其頭を注める。如し和郎の撲れ。痕る。但其隻耳を。
 去。我訝り。又その美を。同ふ。紀二六。則悠々と答ふ。因。肇て。知りぬ。開も亦人の及
 び所。和郎の遠慮の深。感。我。代四郎。伴當。都て。虎。親。又其言。
 側。愕然。て。敬馬。感嘆。せ。而。紀二六。火家の伴當の。
 ある。盒子。一箇。受。令。て。樹下。退。我。急。召。返。他。功。を。且。芳。持。

甘偏提酒舖の尚餘の令を合せて夫役毎の束ねを族一に既すく已牌左  
 側不波伯部十郎真忠の白川村の莊客と三千名許俱して又昨宵所要城  
 分付の途より邸へ還り近習某甲の那菊軸を携り白川村より迎の爲に走  
 去る青侍某乙と俱ふ來りけり他ごとと遅り我去向を尋せり索托ちと  
 あふ至りて虎を視る件の近習青侍白川村の夫役們もうち教馬は和郎の射  
 執を感と稱て喋々登時我又波々伯部真忠不課の虎の眼を射て串に  
 二條の筋を抜き其筋の松の幹係り入ると極て深ければ輒に脱ぎり直忠  
 人の捷れ筋力ある壯士と恥く思ひ矢筈を左右に合緊て隻脚を虎の旬  
 前へ踏掛け身を反りて鬼々と鬼く程お丁と抜抜く御舎を打たれ那身も其二  
 條の筋を持き仰ぎの背を撲りて撞と滾べ大家咄と笑ひけり當下夫役の莊客  
 五六名列卒繩を解執ね杖寄り虎の四足を一緒に合て括結んとする程不怪むべ

件の虎の忽馬とくわむ做りぬ壁煙の滅る如く往方も知る奇異不可思議  
 是のふわふとして近習が持る菊軸の相宛絹を列衣く如に其音腕响けん憶  
 箱を令落共衆人驚駭に且怪てあな何ぞ何ぞと呆れて俱に忙然や姑且  
 去て我思ふ那虎の故画の变化は初眼小點せ故に靈備りて出泉れども既  
 眼と射串れて瞳子と喪いられ其靈鎮りるるも其形像尚を儘めて  
 あつらひ勇士の弓勢神子通して妖勝の徳われむ是成就も大江仁九夫あ  
 この奇妙の奇を信と前知せられ我宿念あるも昨宵中途より近習を返して那  
 菊軸を令來せり萬一の時疑ひ解とあらん欲とく思ふ心をち出て衆人小宜  
 示し我より違ふや否疾との菊軸を用いて見よと云ふ近習はあつて菊軸を  
 其頭を樹の枝に掛ける王僕齊一うち見る果して虎の画幅復りて形状初異なる  
 ると云く其眼も亦初のごく白眼にて瞳子も介る和郎が那時小斫合と云佳又

耳の御見見一時のりり虎の画幅の復る不及びて有り一耳も亦れあり其刃の迹  
るべし。又耳の痕あり。聊連續せざるふ似たり。あふ至り。愈悟る。和郎が懐り  
虎の隻耳のあざざり。定所所以あり。那隻耳の逸早く。菊軸の復り。うけを閉じ見  
ま。誰の知る。後其全體の入り。及び連續をける。證據は隻耳の痕あり。亦是大  
奇といつべし。是をえける。自他の伴當代四郎紀。六直忠。士平。丈。役。小。至。る。ま。噫。嘻  
と。ろ。ろ。威。嘆。の。聲。と。合。い。て。散。動。け。り。登。時。我。又。思。ふ。約。莫。這。大。奇。大。幸。の。皆。是  
和郎の武徳也。上下安堵の思ひ。做せる。小。井。が。儘。東。へ。か。へ。遣。ら。ば。愈。我。を。誑。ま。る。者。の。あ  
ま。恩。怨。賞。罰。を。差。別。の。誣。を。免。れ。さ。か。へ。非。如。大。江。の。関。を。過。り。東。へ。馬。を。找。る。も  
後。れ。伴。當。あ。る。れ。ば。い。ま。遠。く。も。く。ま。我。追。蒐。く。是。も。の。奇。異。を。告。も。あ。べ。功。不。答  
る。送。り。の。美。を。果。さ。ん。ど。既。小。尋。思。を。あ。り。一。六。要。る。な。り。一。莊。客。等。小。則。身。の。暇。哉  
取。せ。り。白。川。村。へ。か。へ。去。せ。り。近。習。小。件。の。菊。軸。を。持。せ。り。代。四。郎。並。自。他。の。士。卒。を。相

従へ馬を早め。山中村まで来る程。土民歎。両三名。路傍に立在。うち譚言の  
耳入り。伴の近習を問。自今辛崎。阪本。大津。る。関。今。等。が。二。個。の。男。少  
年。と。搦。捕。ん。と。三。隊。の。士。卒。と。ち。合。い。て。閉。戦。あ。及。ぶ。折。間。阪。本。の。守。屋。失。火。あり。敵の  
所。為。と。思。ひ。け。件。の。緝。捕。の。士。卒。們。の。鬼。胎。を。抱。え。我。の。後。及。び。孤。敵。小。數。を。破。ら。れ。て  
大津のへ。走。る。と。云。兵。火。の。煙。見。え。る。是。不。敬。馬。く。我。の。ま。る。で。代。四。郎。紀。二。六。開。が。火。家。の  
伴。當。胸。安。く。共。侶。我。が。馬。小。先。ち。で。山。中。越。り。湖。水。の。方。甘。奮。直。走。下。り。と。ぞ  
我。亦。馬。を。走。せ。母。早。く。辛。崎。に。來。て。見。れ。阪。本。の。兵。火。の。煙。を。滅。え。る。因。て。士。卒。を。三。々  
分。ち。て。那。火。を。滅。せ。と。遣。あ。り。其。里。より。我。小。相。從。ひ。代。四。郎。們。と。我。伴。當。あ。る。波。々。伯。部  
十。郎。直。忠。等。八。個。の。近。習。を。これ。の。ま。と。て。這。方。へ。馬。を。輩。へ。瞬。息。間。小。趕。り。と。ま。り。三  
箇。の。頭。人。等。を。叱。り。林。示。ゆ。て。和。郎。小。對。面。の。本。意。を。遂。ち。抑。和。郎。が。大。功。は。是。前。未。聞。の。奇  
事。な。れ。ば。萬。金。を。の。り。賞。買。さ。る。も。尚。足。れ。り。と。ま。り。知。や。又。和。郎。の。伴。當。姥。雪。代。四。郎。直

塚紀三六号が雪吹姫の死を救ふ。悪僧徳用堅削の竊盜奸虐の趣を造る招了  
 致さる。這大功も萬々金皆我の良評也。賞禄を數に當れどもいせん和郎が  
 本性の清白も。曩も我屢取せる名刀衣裳珍器まで。其時毎に當り當り関て敢  
 一箇も用ひざ別小位で當り當り志を舒示して我返せとこれよ。當り當り訴あるの  
 美昨日曛昏小我知りて感嘆の外。然今や億萬の賞禄も。考も和郎を  
 必受くべし。這義の異日將軍家の少え上。御制度の依ん既相別れて各天の二方  
 多。その美も容易くされ我の。和郎を送る。敢高下の礼を用ひ。賢者を貴ぶ  
 心操り。同輩對坐の美因る。是萬一の褒賞。先那菊軸を展覧せよ。と小近  
 習いありて。件の菊軸を相より出。用ひて卒と。親兵衛の唯。と。小言  
 美多。その画を現る。現其虎の耳。小刀痕あり。名画の彩筆活る。像く。白眼。と。瞳  
 子。る。れ。は。猛。虎。の。形。勢。正。是。靈。あり。け。れ。も。偶。然。思。へ。只。願。小。感。嘆。ま。あ。の。時

政元の後方侍り。大杖入道。その隊の野兵も。件の奇談と。靈画の證據を  
 け。聞。け。駭。感。一。て。勅。惟。一。を。援。けて。大江を搦捕す。欲。疎。忽。を。今。と。差。て。  
 悔。思。ひ。け。り。徳。而。近。習。の。件。の。菊。軸。を。卷。け。箱。に。藏。れ。親。兵。衛。の。恭。政。  
 元。も。朝。ひ。最。詳。多。御。示。談。中。君。が。御。好。意。の。過。分。を。兼。り。且。靈。虎。の。絹。入  
 子。と。見。せ。め。一。期。の。欵。び。何。事。欵。是。小。優。ま。死。然。れ。も。虎。を。對。治。の。一。椿。事。ハ。則  
 臣。が。所。為。ホ。一。て。臣。が。功。の。ひ。の。也。搦。向。の。最。も。畏。今。上。皇。帝。並。將。軍。家。の。御。聖  
 徳。と。仁。義。忠。信。を。宗。と。す。寡。君。義。我。實。義。成。父。子。の。餘。澤。也。且。名。馬。走。帆。の。進。退。如  
 意。の。幫助。の。也。ひ。け。ひ。け。然。る。也。御。賞。美。の。當。り。也。但。姥。雪。代。四。郎。直。塚。紀。二  
 六。們。が。不。用。意。也。姫。上。の。御。窮。厄。を。拯。ひ。ま。り。一。梓。仁。が。光。を。増。ま。く。也。聊。其。功  
 あり。似。ち。那。代。四。郎。與。保。の。大。山。道。郎。が。舊。僕。多。り。小。皇。裏。も。大。功。あり。と。り。瀧。田。の。老  
 侯。執。立。く。當。君。不。諫。め。ひ。く。則。仁。と。同。藩。の。士。の。い。へ。も。仁。が。與。傳。母。に。似。る。因。あり

者小の情地不這回の後見して俱小京師へ参りて又直塚紀二六も秋安房へ歸
させぬ副使登崎十一郎照文小從事若黨でひいて十一郎が別小速びる仁の上
心許すと他を京師へ留在せり代四郎の詞敵あるのしゆもひいて余小件の老
社二人も豊前小之河の奇子崎多海賊の孽あり時仁と照文と相枝けて賊徒と對治の
功あり昨宵は又姫よあ又與小亦做さるひひハ仁小立も優るぬ百目小しむると
を政元うち听く膝拍鳴し感嘆多く开小思ひ存ざるといつ備をさるて屋小件の
兩従者どもへ召ねといひせよ一個の近習心と多く遠く身を起して代四郎と紀二六君
命を徳へ推立て卒と連の小找きと政元も招たせて屋小代四郎和老里見の
家臣も這回親兵衛が上京の後見であり又紀二六も延虫崎十一郎の上目とさる
よ親兵衛の幫助あるけ心操さ素生さへあ小敏事と少知り其人柄を思ひる小奇
子の本事ありは二度の大功定小以り異日將軍家へ上る御感大さるるら先

あの上目とさるるてよと叮寧小尉代四郎阿容る氣色も紀二六と共侶の唯々とさる
言葉して舊處へ退れけ當下親兵衛の立替り找寄り為小状小を京をさ誠小相合
御懇命他者も上及及せぬ故郷へ飾錦小優れり猶も上願りは一日も早く安房
へ退り使使の役も果さるま放ち還さるか小請れて政元嗟嘆小堪も左も右も餘
波り竭ねど又留る由もさるといひ腰る錦の裏の緒を緩め命も平してよ親兵衛これ
是官府の急遞脚小用ひる驛路の鈴即是小我毎外も今日必是を腰小佩て
火急の公用小充るの然五畿七道小配當りて其數才小十二あり一箇も是を私小用ひ
か至至寶るるも今不用意小して和郎と送れり餞別小做さる東西小則とれ和郎小
借え東海道小伊勢小北畠あり尾張小斯波あり駿河小今川甲斐小武田伊豆小北條
相武小上杉あり孰も其封疆小新圖を置り敵國の備もよ故小諸國の使者他
御の行客往還不便の事あり遮莫小の鈴を佩する者小則誑使小准せらるるをそれ那



関令等が抑留せざる恒例とを和郎是より去向る其地の関令們を示さる路次の  
 凝滞あるべしとと鮮論し取られ親兵衛の遠く找寄り受載せざる思はる  
 御賜那周公の指南車小勝りぬ便宜をゆる致し百言千言の盡しはるべし  
 未の時程りぬるの別れも卒脚馬小乗るやと薦め此下退給鈴を懐ふ夾  
 生の政元の尚登見を放さるや親兵衛衛衛も既ひけり今日の送行の貴賤の差  
 別る和郎も俱小馬に乗らぬ我もは騎らんと強て立気色をけれ親兵衛殆困  
 果て今も御意に従ひまらん這龍遇お就て願ひ一美あり二関の頭人の失策の慮  
 実檢せざりけ其使等の寺園らん恩免わまほしけれを政元ら守て其美も既ある  
 なる卒共侶ふと身を起て牽寄る馬ふら踏れ親兵衛の些退給徐小馬に乗るけり  
 當下代四郎紀二六も親兵衛當齊々と一霎時政元を自送る波々伯部十郎代受て  
 主の後方小従ふる西と東へ別れ路の最大栄なる勇ま功を感感者るるなりけり

第百四十九回 石薬師の堂小賢少年朝賞と辞ふ  
 東山の銀閣小老和尚騎君と醒む

一日大江親兵衛が天津の関の邊まで管領政元小辞一別早小亭午過る時候  
 多し是より亦復馬を早めて連の小路次を急ぎ下晡より一程又七八里の路を  
 走ると今の石部小遠々ぬ雁南山の麓路ゆく高野林の名小負ふ大野の六地藏  
 堂の頭小来よけり登時親兵衛馬を駐りて左右小立る代四郎と紀二六もふり  
 たり我へもあれ各々昨通宵山路の峻岨を歴か這里まで来おければ然りその疲労  
 きたるけんか知又甲胃櫃を肩小一行囊と駝る奴隸の毎の辛苦を思ひあむべ  
 らる今宵の這頭小人馬の脚を休め逆旅の準備と做さるといふ代四郎紀二六も  
 らるべしと心で隨即親兵衛若黨と相謀りて又幾町も程小白屋まで中  
 廣寄る客店ありけり其庭門より觀入る馬を敷糸くべ死処もあれば則這里小宿を

投め主僕奥多坐席二間を借得居り奴隸名馬走帆と背門多既櫃牽  
 入れて豆草を飼ふ程日暮けり徳而主僕迭代浴俱夕饌を果せ親兵  
 衛代四郎と紀三と五個の親兵七個の伴當と身邊へ招集令久く京師  
 在り程の心疲れを問慰め且昨宵の掙を賞する代四郎並親兵伴當  
 昨宵親兵衛と談講谷中虎と對治の為体及那緝捕の関今も敷走  
 りける事の顛末と知るより一御向官領左京北政の親兵衛と向父  
 其崖略と被されと側聞あれどもお造り猶其事の詳を知らず  
 奇特を感ける并中伴當門の紀三六昨日も京師在りける事情を詳  
 く思ひ是も亦親兵衛の先見遠慮あるもの情地他を照文借得別  
 店在りける其秘事と知り駭くまふ嘆唱多疑の霧亟放けて又  
 よりも親兵衛と合咲る紀三六を見かへ直塚は思ひけん和

郎久く那郎へ賣買の為出入され雑色足輕奴隸の毎大々を回善  
 られ入御向改元主の伴當認めり者あり一牧と向紀三六然那官  
 領小従ひ小可大津造り一時の伴當分散して近習八九名過ざりけ  
 面善りるゆゑ其已前談講谷中虎の奇魂胆と淡く皆混雑の中へ  
 亦怪む者あり代四郎も時直塚の那郎小可姫上の伴當達け  
 る昨宵雪吹姫を送る時直塚の那郎小可姫上の伴當達け  
 料らぎ中途中主小途達ひも一箇の幸へ徳而敗堂造り折直塚と那里  
 在る談講谷中奇異煩雜の中見参入り雑色も走卒奴隸も心  
 在る直塚見ても見ざる如く某と知るより一御向官領左京北政の  
 片も亦聲を低く喃大江主の直塚の下司あり生れさる下司あり実の

崎主の任とて受けるものゆゑに故の徳と之箇様々々と其けの親兵衛屋敷頭で然  
 ろむ。さもあるべし思ふ倍する。這回の掙は才畧都て那機稱まよふ成るべし事  
 あり。異日稲村へかへ参ら必よ受え上へ恩賞思ひの隨多べし。今紀三六羞慚を  
 頭を低く黙然と當下一個の伴若黨行燈の背より膝を找め親兵衛中告  
 やういふ。昨日小可毎の姥雪主の指揮あよめて早く三條より取店と立去  
 であ。その臆は自那木牌をり。辛崎の関を過り。程もあ。日の暮るれば阪本へ  
 され。只得其頭露宿して夜を明し。この朝阪本の関の頭士卒が辛崎へ  
 加勢あり。御身を搦捕んと。人馬を出る事の紛ふ。と。今備を見り。是を漕  
 地喜勘太が亟の尋討に従ひ。守屋の背火を放り。忽地自家の勝利を  
 関の士卒と仍客們的逃るを趕々來あける程。憶も姥雪直塚と親兵衛の成元主  
 従ふ。大津へゆく逢ひ。則主の伴の近習大江の伴賞と告ぐ。俱せられ。

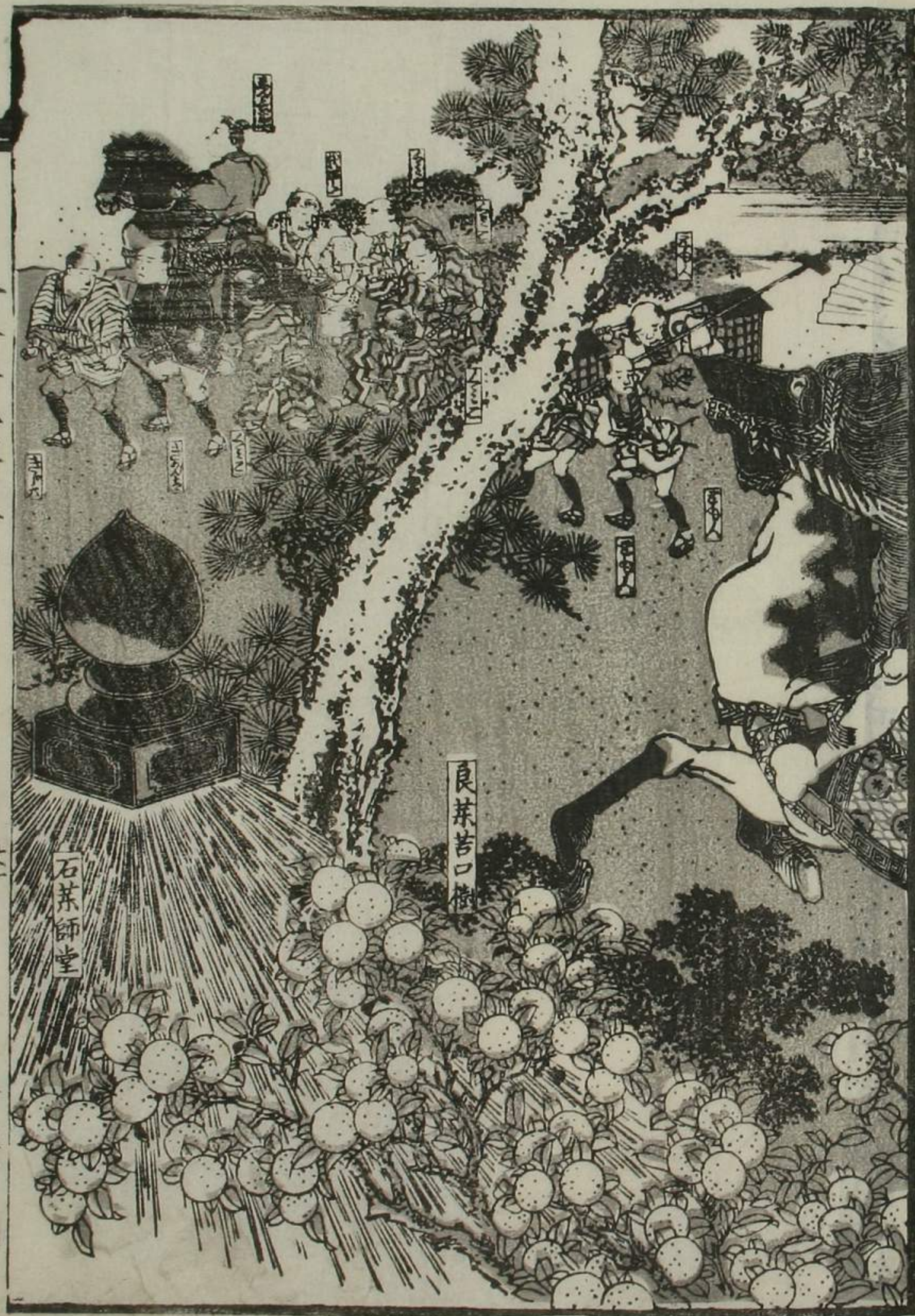
氣と喜勘太語を接し。那時関の爲体を思ふ。早く辛崎の関より。謀合せ  
 ちやあのけ。已牌あ及ぶ。主人の往還を饒ま。関の用を待不候。必客及地  
 方の莊客の聚合する。聞く代四郎紀三六親兵衛深く感と。  
 便宜ふ。いと生る。ち聞く代四郎紀三六親兵衛深く感と。  
 喜勘太向ひ。け。筆て。和郎が良策とも直塚の亞流。一時の大功  
 且自餘の毎の能と媚ま。立地の密議一致の大功成り。賞も尚餘  
 であ。その義も異日雨館へ。上。脚沙汰あり。恩賞孰も疑ふべし。今と諦  
 せ我の只那火。便宜を。則是姫神の冥助。思ひの野夫。中告  
 功の者。あ。と悟る。由る。ける。微妙。又只是の。直塚と云。漕地と云。始終馬  
 脚を露。後々。も那毎の必知る。よ。あ。嗚呼。妙。哉。と。惜め。感  
 嘆。斜る。代四郎親兵衛も感して。己ま。紀三六喜勘太伴當。目

幾身いくしんの餘あまり。當あつりか。一ひとと思おもひけり。姑あは且なて親おや兵衛べいゑいの勅しつ肚はらの財さい囊ふくろより。一ひと裏うらの金かね。一ひと百ひゃく十じゅう數すう兩りやうを合あひ申まをして。是こゝを代よ四し郎らう等ら示ししての事こと。這こゝ御ご金かねの裏うらの我われ使つか命めいを奉たてまつり。時とき事ことあむ日ひの准まも備もせよと。老おや侯こうの賜たまり。と久ひさく懐ふみあはさることも。政せい元げん主しゅの御ご留りゆうせられて。那あの邸ていに在あり。日ひの衣い食じきの医い。くされ。敢あ用もちる所ところあて。舊ふるの俵わたらひ。今いまも。今いまも。因より。意いの明あり。日ひより。く。ま。ま。く。京きやう師しへ遠とほく。を。見みる。那あの里さとの事ことの。後のち易やすら。あ。れ。も。去い向むかひ。猶なほ新あらた関せきと。聞きり。幸さいふ。て。政せい元げん主しゅの。路みちの。次つぎ員いんの。と。て。貸かひ。の。驛えき鈴すずの。我われ膏か油あぶらの。在あり。あ。ら。勘かん合がの。印いんの。ひ。と。く。路みちを。啓あけ。関せきを。過わたる。朝あさ勝かつの上うへと。い。へ。も。志こゝろ仁に以もつ降くだす。諸あ侯こう割わり居いの。今いまの。世よの。天てん子し將しやう軍ぐんの。命めい令れいも。仍なほれ。る。所ところの。信しんれ。が。又また去い向むかひ。不ふ測そくの。異い。変へんある。べ。は。然しかも。亦また知しる。べ。し。猶なほ去い向むかひ。の。又また事ことあり。我われ主しゅ僕べい相あ續つを。四し落らく八はち散さんる。と。も。あ。は。何なんれ。食じきを。求もとむ。負おむ。所ところの。盤ばん纏ぜんの。と。各おのづ。か。然しかも。然しかも。の。准まも備も。い。れ。は。は。け。れ。も。さ。し。

政せい元げん主しゅの。御ご留りゆうせられて。今いまの。御ご金かねを。配くわ分ぶんして。各おのづ。か。の。盤ばん纏ぜん。不ふせん。亦また館くわんの。御ご恩おんの。と。い。へ。も。裏うらの。啓あけ。金かねを。數かずへ。先まづ代よ四し郎らうの。干かん金かね。紀き二に六ろく十じゅう五ご金かね。喜き勘かん太たい十じゅう金かね。五ご個この。親おや兵べいと。一ひと個この。伴ばん若わ黨たう。各おのづ。か。七しち金かねの。餘あまり。の。伴ばんの。奴ぬ隷れい。毎まい々ごと。各おのづ。か。五ご金かねを。中な取とり。せ。尚なほ幾いく金かねを。殘のこる。を。と。て。俵わたらひの。裏うらの。財さい囊ふくろ。あ。ら。藏かくる。又また懐ふみ。あ。は。さ。る。け。り。あ。ら。是こゝ當あつ坐ざに。賞しょう禄りくを。悟さとる。も。悟さとる。ゆ。へ。も。その。ゆ。へ。の。理ことの。ま。素もとより。廉れん直ちきを。宗そうと。せ。る。代よ四し郎らうの。辭ことば。亦また由よしある。恭こうしく。受う戴たいせ。和わ子しの。遠とほ謀まう。宜よろし。あり。今いまも。亦また權けん且な預より。措そぐ。路みちを。用もちる。所ところの。異い日ひ安あ房ぼうへ。歸かへ着き。日ひ。必かな返かへ。と。答こたへ。懐ふみ。あ。は。さ。る。べ。し。代よ四し郎らうの。如ごとく。誰たれも。亦また推お辭ことば。皆みな共とも侶りやう。亦また受うけ。め。り。感かん謝しゃ。堪たへ。ぬ。當あつ下げ親おや兵べい衛ゑい又また今いま宵よの。歇やす店てんの。廣ひろさ。あ。ら。且な厮し歇やすの。行ゆ客かく。主しゅ人にんと。奴ぬ婢べいの。居い處ところと。大だい牙が相あ接せつる。あ。ら。ざ。れ。が。密ひそ談だんを。做なす。と。い。へ。も。洩もれ。る。事こと。あ。ら。然しかも。去い向むかひ。政せい元げん主しゅの。上うへの。ゆ。へ。京きやう師しの。噂うわさを。も。と。べ。る。事こと。是こゝ謹こゝ慎しんの。第だい一いち。

一義之各々の意をゆるるべし。我厄既小釋まより。帰心愈矢の如し。馬千里の駿足  
 るれが一日の安房へ還んよ。容易くはべし思ふも各亦我與必要る京師の淹  
 留多。百日有餘を過せし。今ゆ中途小ゆ捨る。我の軍先も。歸國を  
 いそぐ義あり。佐れが明日より路の程一日十里。三十四町を。をゆくも。年の内  
 ちる還り日易り。その義もあろゆ。と。の大家感服し。左中右の神  
 和君の意見に従へば。食養りゆ。と。答る。間小鎗々と人定の鐘の聲  
 暢ひ来り。いと幽小歩そ。親兵衛の幾番と。鳴き堂の音稍安え。店  
 小二まふけれ。臥草儲をいそりて。各枕小就なけり。徳而其詰朝大江主僕  
 十六七名の早天より起出。早飯を果し。房錢を還る。程小奴隷の名馬  
 走帆小秣を飼。各々約装をば。身甲まどの武具を要せ。皆庸常  
 る打扮ゆ。喜勤大。両個の若黨の馬の左右小従。紀二六。後小跟さ

代四郎の先。あ。鑢奴鎗奴甲。柳相。各其職役あり。皆親  
 兵衛の相従。俱小歇店を出。故御へ。不遠。一日十里と定め  
 六。敢いそ。あ。ね。馬の駿足。あ。日未下刻。早くも十二里の路を  
 来。伊勢の境。入り。石茶師と字せる。一村落を過。と。路の右。小  
 座の佛堂あり。石像の茶師如来。立せる。地方の字。小喚。親兵衛  
 あ。造る時憶。馬を駐。先。立。代四郎を。と。喚。小。小  
 心のつ。ゆ。一。那。靈。虎。の。来。歴。丹。波。園。素。田。郡。茶。師。院。と。喚。做。ま。村。の。一。佛。寺。  
 瑠璃光山茶師院の宝藏より。来。れる。金。岡。の。故。画。る。と。我。那。虎。対  
 治の功。厄。釋。け。還。る。及。び。あ。亦。石。茶。師。堂。あり。且。地方の名。負。七  
 石茶師と。喚。做。ま。思。へ。有。繫。感。る。あ。約。我。生。博。識。る。世。の。人  
 並。佛。菩。薩。小。佞。媚。る。官。福。を。祈。る。べ。う。思。ひ。も。這。堂。中。を。金。扉。門。あり。



八十九傳九車卷三十一

九

八十九傳九車卷三十一



馬を走り  
せまく廣當  
親兵衛を  
追ふ

八十九傳九車卷三十一

文明十年  
女澤堂藏

是も故も存とるらん。騎拍せん快くも。一霎時あやう。鶴んむ。と公詞の言。詠らま。杏後方小騎馬の武士あり。足楯を早めて追蒐まゝの馬蹄の立日近つ程。忽地聲を震立て大江生權且住と。救使々々と喚被けり。是れぞ驚く。這方の主僕。存一佐と見くれ。但見る其武士の京様。頭巾を立鳥帽子を戴た。縹緗の大紋の直無の両袖を巻絞り。金座窪の上の純ね長袴の下と印引折る。腰の螺鈿の両刀と。瑞長の佩做。桃花馬の稜地の鞞の銀や。磨出。波濤不知鳥ある。真紅の長總曳せ。乗た。是則別人を。秋篠將曹廣當。親兵衛の思ひ。豫面善。廣當。遙け。今追蒐。末の事。のあろ。を。救使と叫ぶ。を。早くも馬より降立。路上に迎。代四郎と紀二六と喜勘大。其後方小居り。夥兵並小伴。當們的。皆一列に跪坐。開中。小鎧奴の。津の中。松の像。鎧

御達。ぞ。ゆりける。既。廣當の間。十丈許。小。時。徐る馬の。鞞を。緩め。招。便面を。腰。小。夾。徐々。と。近。つ。石。茶師堂の。頭。馬。より。閃。りと。下。代四郎。則。伴の。奴。隸。其。馬の。鑣。を。合。樹。下。小。敷。糸。を。紀。二。六。腰。や。馬。柄。杓。を。抜。茶師の。石。の。水。盤。の。水。を。汲。馬。小。飼。ふ。長。途。の。疲。勞。を。勤。で。け。當。下。秋。篠。將。曹。廣。當。の。親。兵。衛。向。一。會。以。來。犬。江。主。恙。も。あ。と。芽。出。今。番。勅。詔。を。追。着。正。小。公。私。の。幸。い。奉。り。汗。馬。小。鞭。を。鳴。追。着。正。小。公。私。の。幸。い。い。路。次。の。勅。詔。を。示。見。佛。堂。あり。時。取。便。宜。と。んと。親。兵。衛。跪。居。頭。を。拾。け。答。る。思。ひ。救。使。の。光。臨。白。京。へ。召。さ。せ。も。辭。ひ。中。途。の。傳。達。望。御。の。情。已。に。代。を。憐。せ。ぬ。幸。あ。上。の。幸。小。誘。め。と。い。後。方。を。急。小。代。

四郎紀二六あるるて俱小身を起し立よそ茶師堂小建方筒子小両多を拭け  
 推崩れく左右別れ跪坐する登時秋後廣當の長袴の下括を三里の下ま  
 解緩めく佛堂よりち升り徐小四下を運らるる躬く上座小着し親兵衛  
 も推續して找入る朝ひ居り這堂の廣陝九尺二間小過給則正間の臺座  
 中石像の薬師一佛立あり其佛前より臺盤あり左右の花瓶小茶草と  
 寒梅花を供し中央小青磁の香爐の烟絶あり又方素長脚托の滾  
 落て賽錢櫃の側小在るあり是れ餅を供し燧石の像小缺る餅は  
 固けるが一両箇を頭小ありけりそまより這方る左右の板壁あり色々る画  
 額を多く打するが故にあり新しきあり大なるも小なるも各々願主敬白病厄平安  
 祈処と録しうその餘の堂の簷下小鰐口の鉦を吊るるも看主の僧の在る  
 るる反て便宜とを思ふ廣當の威儀儼然と親兵衛小告る中う大江生業りね這

回和殿が奇虎を對治の大功並奇異の事の趣と昨日政元管領の告願  
 より室町殿則奏聞ありく感特小浅くも倘那親兵衛微も都下の  
 良賤いふまで今ある安堵の思ひを做さんや宜く勸賞あると仰出さるふより公  
 卿猛可詮議あり臨時の除目とせられ則和殿小從六位上を授けあり兵衛  
 尉小成さる者也との美皇京へ召復して仰渡さるべきも他政元小抑留せられて  
 久く在京ありし今又召入る不便の至る早く御使を遣されて中途小恩勅を  
 傳へしと義尚公の執奏小よて躬く其美小儘せられ則御使より宛者と擇み  
 慈小廣當の和殿と射藝の日一面の文ありとせえ且馬上達者れごと其撰  
 擇小元られ往復の間五位の揚名小を假りあり寮の御馬を賜り宣言並  
 足利殿の御教書を受合なり今朝も皇京を騎出ける已の初対の時候  
 召死聞く和殿の昨日大津より政元主辭別れ小亭午過る時候とい



へ。既不足一宿を隔たり。今おと追ひんと。心許る思ふのり。馬の足極小儘  
 せ。直急なほ程小御馬実お逸物也。千里の堪能行心。伴當皆後れて  
 續々我の軍。冬の日のいも。之時お過さる。慮二十里を走。後不對  
 面の本意を遂げ。欽び足小優をと。卒先宣旨と拜見あれ。来意を示  
 多く。懐より。合おし。恭しく。遞與共親兵衛膝を找。受戴は。左右  
 る。開く。急小四下を見。不臂近る。賽錢櫃の邊。あ。方長脚托を  
 引。塵吹拂。徐これ。載。且謹々拜見。宣旨不道。

上卿萬里小路亞相。文明十五年十一月二十六日宣旨。里見安

房守兼上總源朝臣之使臣大江親兵衛金碗宿祢仁。今般虎妖對

治之大功有之。事連。天聽為今古一人者也。宜叙從六位上。為兵衛

尉。藏人右少辨藤原朝臣秋豊奉。とあり。這宣旨不添られ。足利氏

將軍の御教書あり。其文軍旅戰功の感状小似。受領宜く。獻慮小依る。
 載。を儘。返。思。勅賞。命。面目。の。上。外。
 ども。靈虎對治の一椿事。只是左京兆。政元。の。為。偶。の。重。小。答。の。
 此の。美。よ。東。藩。還。る。と。饒。され。是。十二分の。造化。多。聖。恩。あ。及。
 甘。の。罪。と。ゆ。階。級。を。い。け。れ。知。那。虎。原。の。絹。小。入。り。良。賤。安。堵。の。思。
 い。を。做。せ。る。則。是。今。上。皇。帝。の。御。聖。德。及。將。軍。家。の。御。武。德。也。臣。等。聊。做。
 と。あり。の。主。の。義。實。義。成。父。子。忠。孝。の。餘。澤。中。の。い。ひ。け。ん。結。ば。臣。等。功。小。
 あ。ら。む。功。小。あ。ら。む。と。知。り。ま。ら。し。這。恩。賞。を。稟。ま。ら。し。主。を。不。し。て。身。の。利。を。欲。ま。後。の。
 患。を。爭。何。の。せ。と。辯。ふ。を。廣。當。推。林。示。め。然。稟。さ。ら。臣。子。の。道。理。謙。遜。辨。
 讓。の。賢。者。の。德。誼。人。の。及。び。取。り。た。も。天。の。與。る。を。取。ら。れ。及。び。外。口。を。受。る。と。い。ふ。

古人の格言の格をなす。和殿功を功とせ。其美を至尊小奉り。その栄爵を  
 辨ひ。稟さば不敬の罪なり。とまへらむ。况御使を奉りて。迫けく。追束を  
 我廣當へ何をり。反命を仕らんや。枉く。兎兼あるべし。と諭まを親兵衛推  
 返して。その美の實を憚り。臣等も亦違勅の罪を思ひ。約莫人の臣  
 なる者。只其君を以天とま。栄爵の易く。ぬも。義成小出告。て。怒小受ま  
 つ。是との君を不。驕臣のひ。且我身。憂を分ち。樂を俱せんと。折言  
 い。義兄弟七名あり。然る。他。先。這。栄爵を稟。不義。れり  
 甚。非如忠信の拘。不義の人。欲。尙異日。御上  
 安房へ仰遣。され。義成御兼仕。則。敬慮台命。従ひ。吩咐ら。と  
 あり。それ。義兄弟等。と。俱ら。尙。辨ひ。稟。況や中途の御使。當  
 怒の外。ひ。愚。亮。御執成。願。と。諄返。涙。坐。

吐。思。決。忠。義の魂。氣。色。言。語。見。れ。轉。も。わ。れ。廣  
 當。發。感。嘆。して。默。然。と。羊。咄。許。さ。な。り。答。る。類。稀。る。忠。誠。眞  
 義。今。の。世。も。這。賢。少。年。あり。我。始。と。和。殿。の。本。事。と。見。其。武。藝。勁。力。の。億  
 萬人。小。勝。さ。の。心。術。も。亦。慈。善。と。宗。と。仁。と。名。小。恥。さ。べ。し。思。ひ。尙。疎  
 多。今。又。廉。直。辭。讓。の。勅。答。道。理。至。極。と。覺。れ。罷。返。り。其。意。の。如。く。言  
 上。及。べ。然。り。れ。倫。言。汗。の。如。く。返。さ。る。安。房。へ。救。使。を。遣  
 され。敬。慮。を。果。さ。思。召。さ。り。ま。ま。と。戰。世。の。い。か。せん。天。子。將。軍。の  
 御。威。福。も。れ。れ。所。の。再。度。の。朝。議。言。寝。世。の。人。知。る。も。や。惜。む。下  
 と。む。べ。と。の。宣。旨。と。御。教。書。を。令。抗。ら。ち。戴。冠。を。懷。へ。楚。と。夾。ま。親。兵。衛  
 執。納。め。られ。貴。所。の。寬。裕。何。の。時。わ。忘。る。死。幸。は。是。優。ま。と。仁。も。亦。始

上。和君の進止を查する小君子の風を知る。それを勅ふ五虎の中、數々入らば  
 多の尾、碌々雜る片玉。思ひよの果て違はざる。然るも或は今日の御使、倘  
 別人。我云と道理を陳。辨ひ稟も亦聞き。權威を以強。是れ  
 然るとは是非及ばず。又と頭加え。死して志を果さん。亦せん術の  
 る。其鏡、暴も亦遇。我命運の致。所依併君。賜る。最忝く  
 了と云。感謝。他事。廣當。听。點頭。然。其。道理。此  
 前。非理。和殿。推。稟。私。似。公。開。只。我。身。の。罪。を。怕。れ。て。  
 听。非。理。の。人。と。最。も。畏。今。上。六。聖。君。小。御。座。と。且。室。町。殿。尚。賢。相  
 ら。恩。賞。倍。々。の。受。り。ゆ。れ。と。稟。も。及。御。感。あ。ら。む。の。受。り。ゆ。易  
 似。尚。心。許。今。上。和。殿。の。去。向。と。信。濃。路。へ。赴。り。東。海  
 道。より。還。り。ゆ。と。問。て。親。兵。衛。然。逆。の。岐。岨。路。より。と。思。ひ。那。爾。今。の。事。の

上。料。大。津。小。到。り。時。政。元。主。の。赴。り。東。海。道。より。還。れ。と。佩。る。驛  
 鈴。を。借。賜。ひ。其。故。箇。様。々。の。倍。々。の。便。宜。に。依。る。主。の。誨。の。あ。れ。と。生。口。を  
 廣。當。ら。ち。ゆ。れ。も。故。る。不。あ。れ。ぬ。も。我。思。ふ。ゆ。り。あり。東。海。道。の。伊。勢。尾。張。を  
 除。く。の。外。皆。是。京。家。の。敵。地。之。縱。驛。鈴。を。と。ま。る。も。我。恐。り。尚。饒。さ。所  
 あり。且。其。驛。鈴。の。朝。廷。より。室。町。殿。へ。管。の。ひ。其。數。則。十。二。あり。一。も。欠。け。り。は  
 至。宝。る。小。政。元。主。私。一。箇。を。和。殿。へ。貸。り。も。歸。東。の。後。早。く。還。さ。む。其  
 罪。和。殿。の。上。あ。ら。ん。嗚。乎。危。哉。と。問。て。親。兵。衛。ち。驚。れ。我。疎。ぬ。や。知  
 ざ。り。死。心。麼。い。ふ。も。好。ら。や。と。問。ふ。答。ふ。然。る。も。今。思。意。を。て。後。の。患。あ。ら  
 せ。と。と。る。の。驛。鈴。の。我。受。合。と。政。元。主。還。さ。り。倍。々。れ。只。和。殿。の。為。後。後。れ  
 患。ひ。る。の。も。我。も。亦。和。殿。逢。て。勅。答。と。饒。さ。所。證。据。不。做。後。易。け。ん  
 然。又。和。殿。の。尾。張。より。路。を。横。り。信。濃。上。野。を。歷。り。安。房。へ。還。り。ゆ。尾

張へ斯波の領地と美濃と土岐の信濃の村上木曾諏方の祝部の上  
 野武蔵へ扇谷定正主の封域を比皆是京家の御方地の事の便宜を  
 猶且これあり。今番我御使を奉り。和殿のからゆを好まぬ。孰の地中逢ふ  
 べし。其遠近料をくれ。官府の関符を賜り。懐やとる。今在る。今に要る  
 東西南北。是を和殿の與ふ。那御方地にて。這関符あり。去向障りあ  
 る。先よりの意をゆめ。と諭せ。親兵衛感謝の堪む。送る限る。死  
 知音の好情を。教の從て。んや。あろ。と答。軀て腰を撈て。  
 驛鈴を合出。裏の隨の遞與。亦廣當も。懐より関符を。出。與  
 る。當坐の交易閑談。あ。果。けり。登時廣當。天うち仰。今。時程  
 了。頃者の日の短。暮。程。の。俣。別。と。ひ。軀  
 身を起。大江の奴隷。直。草履。牽。寄。馬の。邊。程。

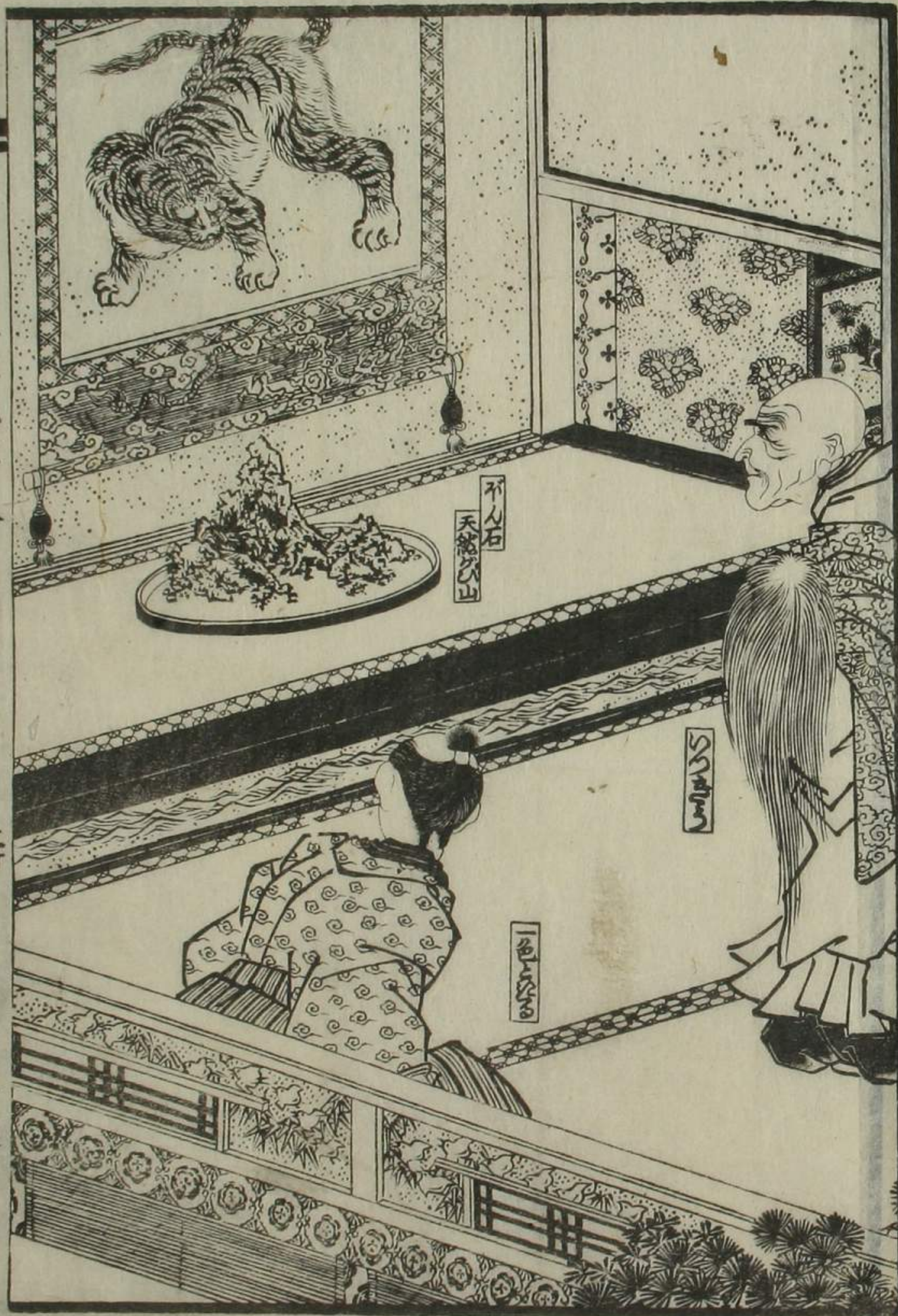
親兵衛も亦送り。秋篠主の伴當の後。の。末。逢。其。地方。駁。を。投。人  
 中。三。名。途。送。り。ま。わ。る。と。の。を。廣。當。の。の。然。と。せ。ら  
 今。亦。一。騎。と。も。後。れる。者。毎。の。末。逢。其。地方。駁。を。投。人  
 馬を。明日。の。皇。京。へ。参。り。参。り。と。な。り。馬。の。閃。り。と。ち。跨。り。  
 鞭。中。く。走。る。を。一。霎。時。目。送。る。親。兵。衛。們。代。四。郎。紀。二。六。い。の。中。に。親。兵  
 伴。當。推。並。く。只。顧。心。不。感。して。己。錦。上。小。花。を。添。雪。中。小。炭。を。餽。る。情  
 義。面。る。が。う。け。る。鳴。平。御。使。を。哉。と。思。ふ。就。親。兵。衛。が。榮。利。を。欲  
 せ。忠。信。の。又。一。段。の。餘。聲。香。高。り。那。賢。る。と。這。大。賢。を。よ。く。知。る。を。ゆ。べ  
 けん。と。智。ある。嘆。賞。あり。詰。分。兩。頭。介。程。小。管。領。左。京。大。丈。政。元。を  
 大江。親。兵。衛。別。上。り。更。又。馬。を。走。せ。て。即。日。京。師。へ。か。へ。り。軀。を  
 花。の。御。所。へ。参。上。り。將。軍。義。尚。公。へ。上。る。不。里。見。の。使。者。大江。親。兵。衛

仁孝天皇御紀の大功ありし事の顛末。又澄月直道が賀茂河原の勤役の頭  
 人名と同志殿の事。且那野兵衛が逆謀の事。又悪僧徳用堅削が隨落穴  
 鼠の趣まら。其條と漏れとある。就中大江親兵衛の智勇類る功を稱て  
 須復り虎の菊軸を憲覽に入れ。義尚公駭嘆し。あま大きなる積  
 御管領畠山左衛門督政長を。件の菊軸を禁裡御所へあせり。獻  
 覽ふ備あり。王上故ら御感のあまり。則獻慮依る所公卿猛可詮  
 議の件の大江親兵衛仁に宜く恩賞あり。詰朝秋篠將曲日廣當  
 御使とて仁を路次へ趕しめ。既ふよいるが如し。徳而其次の日不  
 廣當皇城へ来り。則大江親兵衛が忠義の為罪を思へて官爵を  
 辭し。なりける言の切り。箇様とて。上て宣旨を返し。又室町殿  
 へも件の義を告東。御教書を返却せし。王上と首なり。義尚公親

兵衛が違勅をば外。あつて。其忠信の心操を御感愈淺く。重く  
 安房へ御使を遣さるべし。と議せし。東國も亦久く乱れ。人馬の通  
 路不便の少あり。然に百里の命を寄ると。輒くざる所。朝議果  
 さざるたるを惜は者。を言りける。徳而廣當の日政元の郎。造り。對  
 面を請ふ。告る。昨日在下御使を奉り。那大江親兵衛を趕し。石某  
 師堂。對面の折他。不憑れる。其故。君が親兵衛。貸の。云驛  
 鈴をの。他東海道を。歸國の後速返。な。其。か  
 相公も亦。受。あ。妙。あ。是。亦。知。所。詮  
 危。東海道を。過。信濃路。赴。願。這御鈴を。相公。返  
 去。あ。合。出。在。下。遞。與。大江。遠。慮。宜。以。第一

相公のめん為るれば在下則受命を他代りて返上を收めさせぬねと正首小  
 かの意を傳へ。驛鈴を合ひ出く返上を政元の苦味して開るべく心つた  
 たりたといひ。躬く受命を懐を啓る見く。紉を締めて腰を吊けり。その  
 折に政元の親兵衛が辨勅のよと。廣當の少知く。及びくを恥る色あり  
 ちどりの廣當の敢又言を遠く別を告ぐ。伴當おて宿所退る  
 ちどりの廣當の敢又言を遠く別を告ぐ。伴當おて宿所退る  
 這項又政元の幸崎の関の頭人惟一並に阪本大津の関の頭人鶴宗松物  
 等が疎忽の罪を讞断して上目を室町殿に伺ひたり。則老松惟一の所領を  
 召放く。那身を所親の関に虎を實檢せり。士卒三名の俱に禁獄の後  
 一百箇口で追放さる。又根古下鶴宗大杖松物の屏居稍久く。その罪を  
 饒されけり。是等も亦大江仁が仁慈の餘波を在ける。然るは後件の三関を  
 停廢し。又関令を置れど。北國の敵和順し。境を犯されぬ。その時又政

元の有司の命にて。御向の牢獄に閉籠る。徳用と堅削を牽出させ。其積  
 悪を責問する。この悪僧の死を且御向の紀二六小謀られて。其積  
 事と告ぐ。今ら頼陳さる由り。又何容々と招了る。其故小徳  
 用堅削の竟首を知られて。河原小鼻首せられ。徳用が親香西復六が主君を  
 恨みて出仕せむ。遂に老病は假托。致仕退隱を請ふ。政元則復六が二  
 男香西再六政景と。本領阿波より召登りて親の家督を取せり。然るは政  
 元の仍ふ所事。公小似れども。約莫這回の殃孽の皆政元の奸邪より出。初  
 徳用が讒訴と信容ま。大江親兵衛を豪留る。台命を以て君を伴る  
 罪を思ひ。且奇を好む虎を走らし。貴賤の真愛と惹出。或は又悪僧と  
 門小近づて。遂に雪吹姫を竊る。暁得らぬ人の罪を責れども。那身の  
 罪をいふまると。議する者。又くけむ。官中の首尾愈宜か。政元是を



三

○文溪堂藏



○文溪堂藏

休偈を  
 一休偈を  
 説て画虎を  
 度をも

熊合後下

真愛怕れて遂久く出仕せむ亦病着の假托を管領職を辭し京ありて  
其頭職を罷らまて政長一人管領たり是よりして後三松を廢せり文明十  
八丙午の年小至りて政元復管領たりやうはく出頭あるけるあは是後の  
話へ介程の那を腫の虎の画幅の敵臨見を経く後小義尚公是を御父  
東山殿政へまのせぬひ小義政好事の癖るれば愛西復り珍重して常小  
坐右小横させ其奇を誇りのひけり信り程小有一日紫野る大徳寺の  
一休老和尚と珍らふ由杖を東山小曳く路次の便宜よりけん獨銀閣  
伺候して義政公と要法禪機の暗譚數刻及ひけり畢竟一休老和尚  
東山殿小見参るるその日の話説甚麼を也出像をる小載考のり猶  
詳不知ま欲くば開ち又下回小解分るを聴ねがし

南總里見八犬傳九輯卷之三十一終



